

「宗教の神学」「宗教間対話」 における類型論

- 排他主義 (exclusivism) : 救いは自宗教においてのみ
- 包括主義 (inclusivism) : 他の宗教にも救済の可能性
- 多元主義 (pluralism) : すべての宗教は基本的に対等

排他主義

- 伝統的なカトリックの宗教理解——「教会の外に救いなし」
- プロテスタントの保守派
- 特 徴
 - キリスト教と他宗教との間の「断絶」を強調
 - 聖書の権威を強調——逐語靈感説
 - 「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない。」(ヨハネ14:6)
 - キリスト論を強調——K・バルトへの言及

包括主義

- 第二バチカン公会議以降のカトリック
- 宣言「我らの時代に」(Nostra Aetate)で他の宗教の真理性を否定しないことを確認
- 1960年代以降の世界教会協議会(WCC)における他宗教理解
- 特 徴
 - 救済は他の宗教においても可能(神の恵みの普遍性)
 - キリスト教と他宗教の間には包括的な上下関係があると考えられる。

多元主義

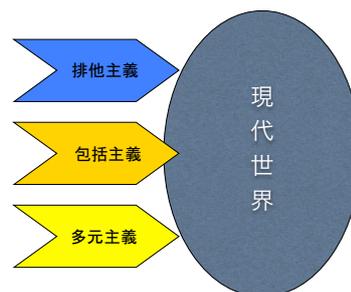
- 宗教的多元性は恒常的なものであり、それはいかなる単一の宗教にも取って代えられることはない。
- 諸宗教の中には固有の真理がある(ただし、すべての宗教が救済的意義を持っているわけではない)。
- いかなる宗教も、最終的・絶対的・普遍的な真理を保持していると言うことはできない。
- キリスト教信仰にとってイエスは独特の意味を持っているが、その独自性は排他的な形で優越性・超越性と結びつけられるべきではない。

多元主義モデルの問題点

- 置換主義 (supersessionism)
- 例: ユダヤ教とキリスト教の関係
「古いイスラエル」と「新しいイスラエル」
「旧約聖書」と「新約聖書」



多元主義モデルの問題点



包括主義の再考

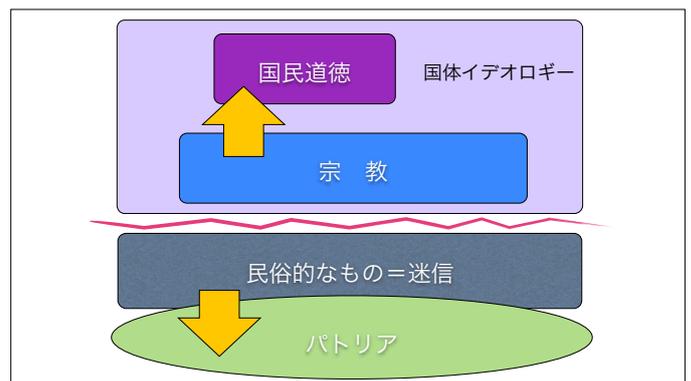
- 包括主義者は、他の宗教に対する肯定的な関心を持っている。
- 神仏習合とその近代的変容
 - 明治政府は神仏習合を否定し、神仏分離を実行。
 - 神仏習合の包括主義から国体イデオロギーの包括主義（神仏補完）へ
- イスラームにとっての「啓典の民」（ユダヤ教徒・キリスト教徒）

排他主義の再考

- 「ファンダメンタルなもの」の探求
- 西洋的近代への批判的応答として
 - 「原理主義を定義づける反近代の衝動は、したがって**プレモダン**ではなく**ポストモダン**のプロジェクトとして、よりよく理解されるだろう。**原理主義のポストモダン性**とは、何よりもヨーロッパ・アメリカによるヘゲモニーの武器としての**近代性を拒絶**するところにある——そしてこの点において、**イスラーム原理主義**はじっさいに範例的なケースである——ことが認識されなければならない」（ネグリ&ハート『帝国』2003年）。
- ナショナリズムへの抵抗の力としての正統主義者（排他主義者）

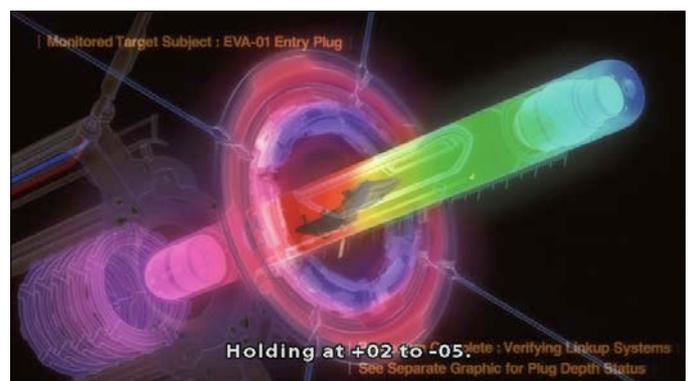
まとめ

- 信念を持ちながら、自らの立場を絶対視しないために
 - 「他者性」の認識、他者との「対話」
- 宗教の相互関係の類型論にとどまらず、宗教概念からこぼれ落ちてきたものに着目
 - 「民俗的なもの」
 - 国家（＝「想像の共同体」）とパトリア（郷土）



まとめ

- アイデンティティ・ポリティクスの罫に注意する
 - 文化的・宗教的アイデンティティを強調することによって、「異質な他者」をあぶりだそうとする傾向が強まっている（特にヨーロッパで）。
- アイデンティティの多様性に対する認識を深める必要性



エヴァに見る伝統と革新

- 一と多をめぐる物語
- A Tフィールド、人類補完計画 (→死海文書)
- 創造論と終末論
- アダム、エヴァ、リリス
- synchronization
- 人と機械 (エヴァ) の同調

